

時41
269

杉村春浦著
山田國輝畫

復古夢物語 二編 二冊

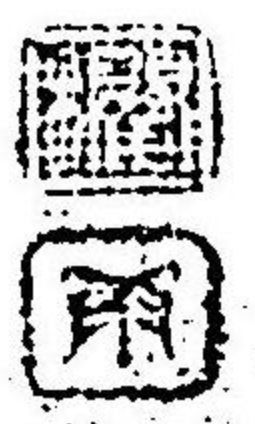
東京
書肆

文永堂

在事如法格著之在人
得遠智勝算一
先天下無敵手

明治七年三月梅雨
弘菴先生詩以代序

鎮西雄飛居士





堀織部正

利熈

利熈ハ伊豆守利堅の男あり才畧衆小秀也

復古二〇一



壯年ハ函館奉行となり後外國奉行小登容
 ありし利熈カミケ閣老安藤信正ガ暴政を患ひ
 屢敢諫するを怒り還て信正ガ逆威の爲よ
 幽閉せらる然るハ利熈ハ國政の乱
 こと歎き鳥之將死其鳴也哀人之將死其
 言也善云云の諫書ハ閣老の許小遺一
 終小自殺せし時万延辛酉正月十有五日嗟
 如此き英雄時小會せしもの美名千歳ハ
 録利熈之詩 傳ハ惜ハ文武兼備の臣

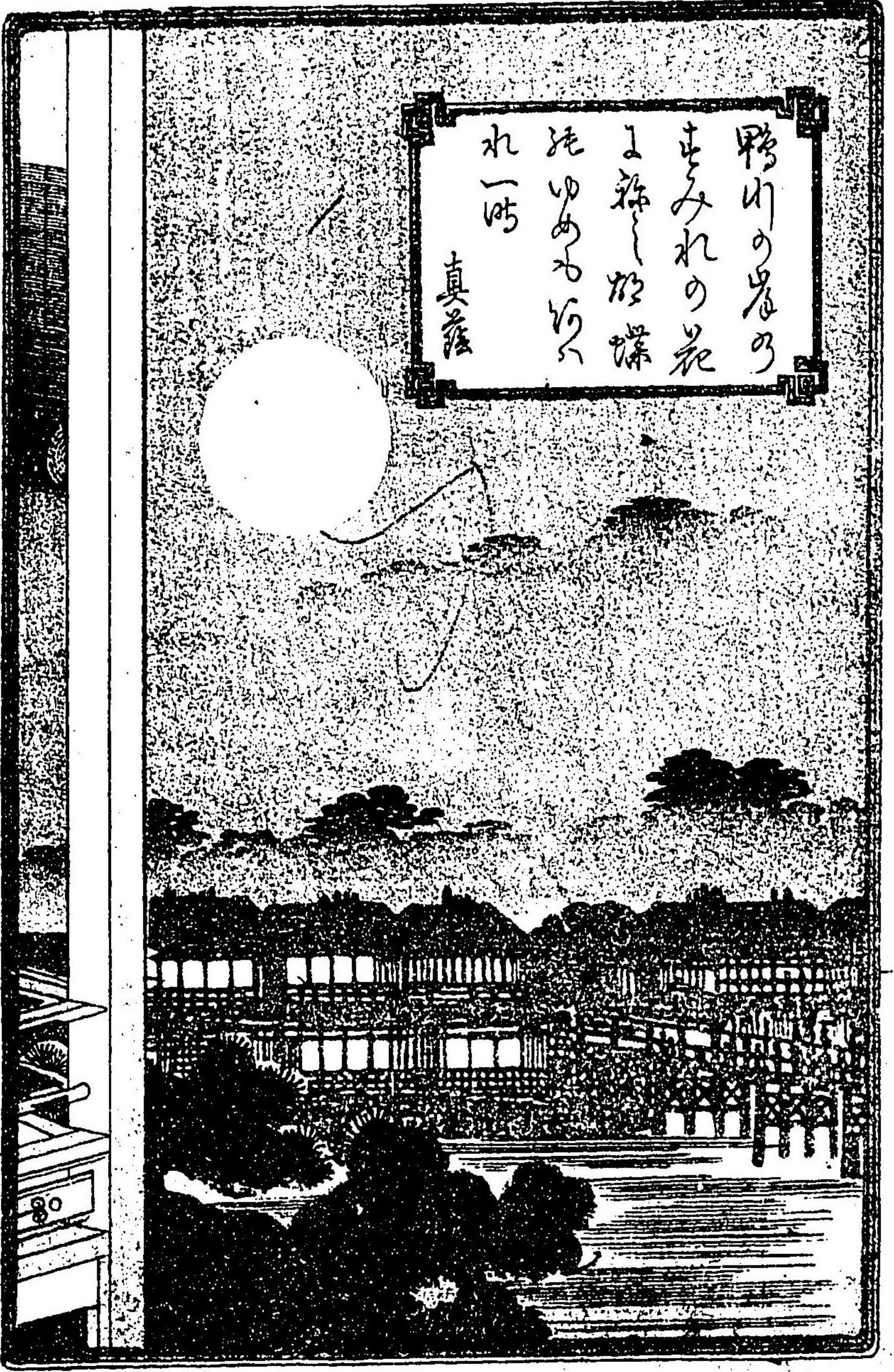
堀家臣
 甲田顯三

曠世奇才欽而賢行藏易地業皆然
 氣節千秋出師表清高万古去来篇
 苦辛本識由三顧忠勇無心戴三天
 男子功名應若是縱教一醉曲肱眠



島田左近権大尉

妾女君香



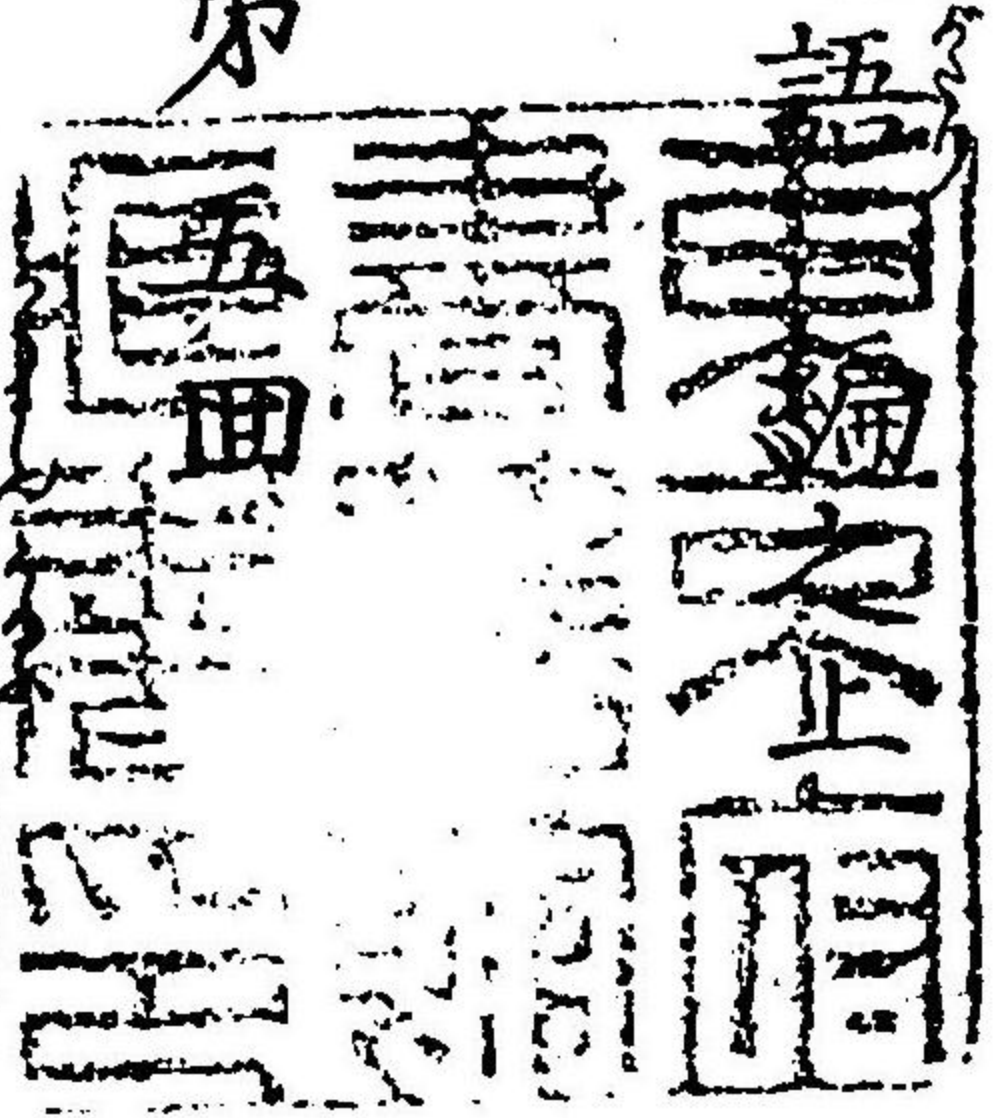
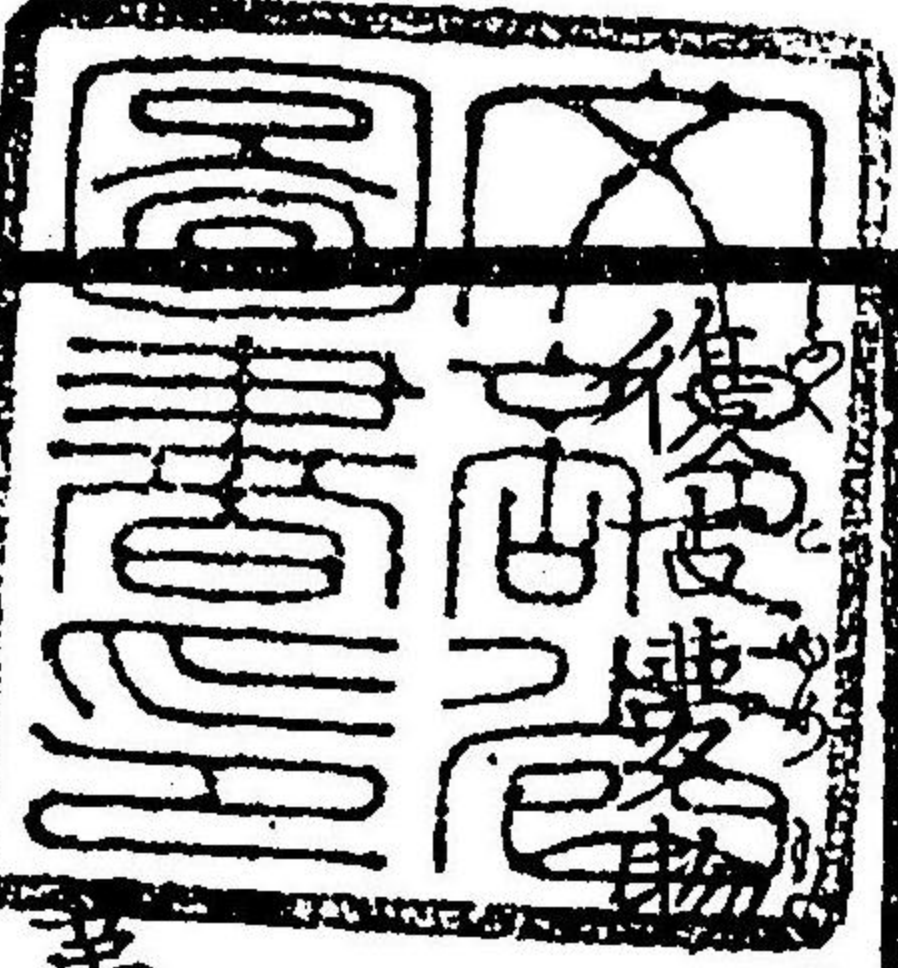
鴨川の夜
まみれの花
よ新しげな
花ゆめも
れ一時
真露

真露

天風一陣披雪岳
 雪子秋射眼来
 甲戌三月下浣
 東海漁者題



復古二ノロニ



松村春輔編次

再説安政七年庚申閏三月に至り萬延と改元あり這も去年
 江戸の本城炎上の凶ありより先規の如く行をせし
 絶一年を経へて翌辛酉の年ハ 神武帝始て御即位の
 大禮ありし千支に當る辰以て亦文久と改元有り是皆古典
 の在れば成べし然るも去年櫻田の一案ありし幕府ハ鎖

港の沙汰も為に交易日々に盛んなる。物價ハ弥騰貴し、萬
民幕府の苛政に困り、自然御政體と恨む物。徳川家三
百年來の武威も稍衰んと閣老安藤侍從を始め參政小吏も
會議と凝り、這儘過ぎ其時を諸侯ハ大半 朝命を奉じて幕
府の命と違背倣し幕吏と輕侮り只管勤王旗名目と倣時ハ
朝威日々に盛み、幕威ハ終に衰へん然る後再び徳川の
武威と奮起せん、關白殿を繕容れ 朝廷と互に拵ら
皇妹と將軍の室ふ娶らんと尤急務の謀議あり蓋し陽向ハ

復古二上

公武御合体を名とし、入興あつんと奏せしむ。朝廷
少毛縉紳家衆評り、議論區々にて決議倣難き由なり、
既に殿下ハ決心在り且ハ戊午の覆倣は畏怖し、縉紳家の内
みも差て異論もあつ、遂に幕府の意は應ぶる由に
奏されり。朝議漸確定し 皇妹東興の御用意あり二
月廿八日 皇妹和宮、御方宣下、賜ひ親子内親王とを
稱へ、悠々殿下ハ幕府りの御沙汰にて先年來國家
の為に御尽力あり、賞として千石家禄と加増あり是皆安藤

侍従等が謀る所あり古も例在りもせぬ武將の妻も畏くも
竹の園生れ未葉も人の種よりぬて入尊き位の姫宮殿
賄賂と暴威の媒妁も結ぶ赤繩や糸ふげの錦飾り御車や
さつと峠を過ぎ占よ忌てかへる相生の名ハ八千代も唱ふ共
其甲斐まゝこの度の東下ハ幕府の為よ又一層の怒り後
増し翌年阪下の椿事よ及ぶ不題再説同年十月二十日内親
王十六歳東よ下向しはよとと宮中と御發輿あり御途中も美
麗と尽し公卿殿上人も多く供し奉り上下前後の御供廻り

復古二上二

凡そ三萬五六千名東海道の驛路も群集して是亦未曾有の
緯とり御途中恙もなから十一月十五日親子内親王江府
よ著御まゝし七清水の殿よ入御し給ひ十二月十二日まゝ
本城へ入らせ給ふ是より先同年五月の下旬より乾の方よ當
つと流星頭出其長さ數十丈一天よ薄く靡く容体よまがら
銀河の如くなりしも六月の下旬よ至り次第くよ薄らなり
遂に程なく消えたり然るに近來夷人渡来しとより内憂外
患日々募り近きよ兵革と做らん兆なりと評し諸人大し

怖と生ぜり此歳の暮明と文久二壬戌年正月元日南都
春日の社前より掛る神鏡の自然破烈まると諸人其怪意を
多々怖と這ハ天下より大變の有んと神驗在る凶瑞ありんと
街説喋々流布する中春日の大宮司よりも這の容体を奏
聞よ遂にれば 朝廷速に奉幣を捧げらひ国家安全の祭と
做し給ふ同月十五日東武阪下御門の下馬先より閣老安藤
對馬守信正の登城を伺ひ鑛炮一發打りけり頭出る浪士の
勢ひ駕籠と目途と切付る尖き壯士の太刀風より何れん以て

たまるべき不意を撃れり侍従信正狼狽して脱れんと駕籠
より片足踏出を度端より肩先深く切付られ既より危き進退よ
信正數ヶ所の手疵と紫り助りも見へざり恥知る
供人等踏止り暫時の苦戦より活路を得しるが信正塵も身
と遁走ると不往と浪士方追討做んと惡戦より或ハ討死深
一の為より其終斃る果しうと安藤信正の供人等も死亡怪我
人の者二十餘名よ及び一とぞ然るよ這の日閣老と討んと
欲し七人の壯士各懷中より斬衣趣意書と認めり一通宛持り

さうするこの浪士ハ元是前の外国奉行堀織部正利熙の家
臣三島三平豊原邦之助細谷忠存吉野敬助浅野儀助相馬千
之助内田萬之助の七人より倅る大吏より速び一ハ去酉の春
外夷江戸の地より商館造営致度旨願出小對州の存意
御殿山の當節無用の地ありければ八萬坪を外夷より貸与
へんと議せしむると利熙是を拒と強く議論を竭し諫諍と
とのりども對州へ閣老の權威と奮ひ我意と主しと利熙
と幽閑せしむ然るも利賢憤激し絶て對州閣下より遺書と

呈しと遂に切腹做せしむる家子等主人利熙が鬱憤を晴ら
さんと謀り且も國家の乱臣許まんとりざる罪を正し斯る奉
動よ及び一吏巨細よ書たるハ君々たれば臣々も織部正
の直言を容ざりし信正侍従の暴威よ比せをこの七人の家
子ハ臣家の道を尽したる天下の忠士と稱へし可あらん二月
十一日親子内親王東城よ於る御婚姻の大禮ありせしれ以
後御臺所と稱し奉るべき旨達し給ひぬ三月下旬井伊掃部
頭直憲幕府の使節として上京做し参内し奉り御婚儀首

尾能整ひ一紙奏聞ゆりて暫時京洛に滞りたる儘て島津和泉久光を修理大夫中將東江に罷んと四月六日播州姫路の宿に著在し諸國の浪士數百名群る鳥の集まる如く泉州の旅館より來り幕府の罪を鳴りて公主に憑て 奏聞と遂攘夷の御親征を促し奉らんと義舉を募りたる其黨より中山殿の臣田中河内介筑前の脱藩平野次郎飯居簡平大谷雄作青山頼母橋本経藏原陸太鶴田陶司酒井傳次郎荒卷半三郎中垣鎗太郎安積五郎小河弥右工門田辺傳一朗貝賀宮門

馬原供

ガサツ

夏川博平廣瀬友之進矢野勘三郎喜入櫻津川上式部關山丸小林將監川上彦助有馬新七橋口莊助田川謙助山田十兵衛柴田愛次郎弟子九竜助西田真五郎伊牟田尚平森山新五左門山本四郎加屋栄太竹下熊男真武兵工野沢勘十郎村松省三森玉彦宇野賢藏堀鎌之助等と始り其餘鳥合の徒二百名余同志と唱へ集りし其中筑前の脱士平野次郎国臣巨魁泉州に上書做さ其文に曰癸丑以來幕吏御國體を損し朝廷を凌蔑し恣に外夷と條約と做し天下將

城に陥んと欲這を以て臣等如斯く奉動し君候の英武に附
き絆を一時に謀らんと欲せし臣等鎮西の有志と密談し義舉
の志存遂度存念有るといふも鳥合の兵に暴舉と同日く指
令の歸する所を知らざる是に憑て今一の大藩に倚り而して
絆を謀るゝ如くと昼夜是の會するに什麼も機會のな
うりしに這度君候の出府あるを聞き西海山陽南海の有志
を談ひ京扱に借居し通行を待て一日千秋の如く倣し今
君候は拜謁し臣等が宿志を果すに至る願くを神速に恢復

の基に開らん今直に大坂彦根二條の諸城に義兵を挙げ京
師在留の幕吏と拂ひ宮堂上の幽閑を解き七道の諸侯へ
勅命を賜り鳳輦を函根の嶺に下し幕府の罪を正し給ふ
可き旨と訴へんを議し各同意欲由を述べれば泉州草芥
の徒の誠忠を賞し黙し難くや思されらん此一举を承諾あり
て彼輩と引卒て浪花に連れ夫より伏見へ登られり這
時筑前の大守も東武も参勤倣さんとして既に播州大倉谷
まで登られりと幸ひとし平野次郎八田主たる故を以て這



度の一挙と告ぐれハ兎角と評議有リ如何ある思慮もや
有らん平野が先年国禁を犯し脱走做せし罪と咎め縛り
東江参勤とも止られ其後帰國在り是より平野国臣も
本国引是嚴しく獄屋に下されり

附之云此一挙巨魁平野次郎国臣ハ癸丑以来外夷渡来
の始めより國體を失ひし故憂ひ専横の志を遂げんと
粉骨碎身し去る戊午の年自國脱脱し京師に登り同
志を誘ひ素心を遂んと做欲せし其頃ハ幕威威盛ん

復古三十八

しと草莽の者の嚴重に探索ありける折柄ハ京
櫻の間ハ足を止るにあり難きより同志清水寺の住
僧成就院月照と俱し難を避んと兩人西国へ下りあり
這時の緯ありん月照の兄何某の僧ハ東江に下り同
志と事秘謀らんと伏見の里みく離別を做す時ハ月照
和哥を詠し兄あり僧に贈りたるハ
西の海あつ海の家と魚をくもあらハ大君の末あり
あくる月照の兄あり僧も東江に下り間なく幕府の

為し死せし由作者此人の名を記し漏たるをとりも本
意をたよるん憊く次郎月照のゆかりを西国より下り
しうど時いまに至らばしと身と寄まなき方もあり所々
一漂泊艱難一歎息の餘り月照の薩下の海に身と投ド
て死せしうど次郎国臣の身と全ふ一此項を諸所
潜居做しつ這度泉州の上京を聞同志を語り巨魁と
あり大まふ奮拵せしとるん

題而説陳島津久光ハ同日烏合の徒を引はきく伏見の

馭板橋の邸し着り然るに伏見の町奉行林肥後守忠文を
兼て此度の一挙播州に起りたるを聞より痛く驚怖し早速
京師に使を馳らし所司代屋敷へ憊々と這回の序次を告し
うべ酒井若狭守忠義愕然として在京の幕吏を悉く召集め島
津和泉何時烏合の徒を引連京師と襲計んゆ計り難しと甲
冑に身と堅め二條の城へ楯籠り一戦ゆも速ぶき用意と做
つ昼夜防禦の術を尽し亦天朝へ奏せやう何時浮浪の徒
どもも暴戾の説を主張做し奏聞做んゆ計り難し其節必し御

驚動在せり是卒示の御所置在すトくやう萬一暴挙の振舞ひ
ゆゑを我等一國の力を竭し諸家警衛の者ども不指揮致し
誅伐致まなき旨傳奏廣稿議同光成卿坊城亞相俊克卿を
奏用とぞ做したりる然るに此度の擾動も市中の者
も大きに懼れ家財調度を東西に持運び既し京師の形勢を
今日も戦ひの庭と變り市中に黒土と變化みんと言雖し
徒横無尽に動揺せしふ同十六日巳の刺過島津泉州緯穩便
に入京ゆりし市中の者も漸く皆々安堵の思ひをみし

廣吉上十

互ふ無事とぞ賀たりたり然るに泉州の近衛殿下の書を
呈し陳るやう此度東江より下り幕府の暴政を變革有やう
周旋いし去ル戊午ノ年以來勅諭を尊奉りては外夷と叨
りし通商倣へ到へ正義の親王三公を始めと一橋水戸越
前土佐宇和島その外諸侯旗本に至るまで悉く禁固し庶人
ハ死流の刑を行ひしより深く宸襟を惱痛らるの由を伺
ひ奉りし諸國の人心紛乱し既し浪士の徒も勤王攘夷
の議論と主張し終は慷慨激烈の餘りよりハ還て國家騷乱

の端を生し勤王の趣意を忘脚する而已多し但却て外夷
の術中へ陥るとを恐るる事大事に就き東武より出府し此儀
建白致さるる含みより播州姫路に至着の砌浪士追々馳集
り大畧右の趣意稟立る所つこ彼等素心黙難く伏見の駅
まで各連置き我久光参殿仕り候多し此儀宜しく奏聞を
然る可きやう願われり殿下所濟し其旨逐一議奏
の公卿直ちふ奏聞致されり

第六回

前號再議奏衆より島津泉州は上書の趣意を具し
奏聞ありしに龍顔殊に懸しく則ち勅諭を下
し給ふ島津久光事暫時京師に滞まりし諸浪士は
動乱取鎮め海内静謐の趣意ありき旨盛慮在
せしれは泉州有がく奉裁し是より京師に滞留
ありし浪士の中より薩州の
脱士有馬新七田中謙助柴山愛次郎橋口壯助森山
新五左エ門弟子丸新助西田直太郎等同廿二日伏見迄

馳登り寺田屋とらへる船宿より止宿し泉州の令と待居
たりしが許より過激の徒多れば泉州の懸引猶豫の
所置を待兼く暴論を吐き募り既に同志の諫めを
容れむ今もも暴発し速なるを同藩奈良原喜八
郎山口金之進道島五郎兵衛江夏仲左エ門等と争
論し做り終は双方又傷し速び有馬新七以下八人
討果され奈良原の方も八九人計り手疵を負ひし
中のみ道島五郎兵衛へ討死ありし有馬以下の

後古二上ノ上ニ

死骸と共に同駅大黒菴の寺中より葬りし是の争
動し伏見の駅中大きく騒ぐし程多く鎮静做し
たりたる題説長州の大守毛利大膳大夫大江敬親朝臣
近未外夷渡来這方内患甚しをを慷慨し東江櫻田の
邸に在居る屢幕府へ建言あると人ども更し採用在
ざりしに遂に閑宿閣老より逼り外夷の所置を伺われ
しに閣老の答へしは是を外國との通信に残らし
慮伺し清の上和親條約做したる故今もも変革の所置

做一難き由返答致され毛利候より重ねて申出さるやう
決一に左様の儀より有まじく幕府に於るを 勅許と
得ざりて條約を取結なれりやう 朝廷は是を
逆鱗きゆ幕府の暴政を改革の御所置あると粗
承らる及び莫り亦諸國の浪士等其機に乗じ西國
の諸侯を鼓動し京師に馳登り 朝廷と指拏し四方
よ号令を下し時々外患内擾の大乱を醸さん願くは
將軍先非悔諾し京師を厚く奉恭し公武一和と表

しと以て物論鎮定しんと成 既し我臣下永井雅楽と
申者昨年来京師し遣はし彼是探索し置し付
その趣き心得居り候へも此者よ御尋ねありと然るに
しと申されとて閣老久世侍従大まよ恐怖ありと直
よ永井雅楽呼出し一々尋問ありし疑ひも多し説
あるやう、永井をよと 朝廷向預執成しとせんとも閣老
より多くの引出物を取せ種々密談し做りし永井素
よを鎖国好みと和議を主とする憶断ゆ幕府と議

論相會ろんさうかいより久世くせ閻老えんらうの特命とくめいを受け同藩どうはん来原らいげん良藏らうざうと
りしる者ものを差漆さしきとみし三月さんげつ中旬ちゆうぐん京師きやうしに登のぼるもの永井ながい
雅楽ががくハ秀才しやうざい衆人しゆじんハ越こへ和漢わかんの事情じやうけいハ能通のうつう一いつ其上そのかみ博識はくしき
の者ものあるゆへ京師きやうしハ着ちやし一いつ談奏だんそう中山ちゆうせん大納言だいなごん忠能ちゆのう卿きやうの館たんでん
ハ参殿さんてん一いつ言上ごんじやう倣なましるやう方今かうこん宇内ううちの形勢けいせい容易やういあり
ぬ御時ごとき節せつハ公武こうぶの間御隔意おんかくいの姿すがたと倣なまると憂々うれうれハ
御大事ごだいじより幕府まくふ一端いつたん外夷がいゑい猛烈めうれつの威いハ因循いんじゆん一いつ朝あさ
廷ていへ伺うかがふに用港ようかうの條約じやうやくより結むすび一いつと逆鱗ぎやくりん一形いつがた

後古二上十四

あつば既すでハ関東かんとうの所置しよぢ御札ごさしハ相成あひなり條約じやうやく破壊はくわいありせし
るべきの御更ごまじ御尤ごゆゑより候まうへ共とも一旦いつたん外国がいこくと條約じやうやくより筋すぢ
なく破敗はくぱいありし時ときハ忽たちち兵端へいたん展開てんかいし立所たちどころハ莫大もくたいの国難こくなん
を醸かさんと必然ひつぜんハ候まうへを寛大くわんだいの慮しゆりありしせしれ幕まくら
府ふ既往きつじやうの罪つみ御咎ごとがめなく御合ごが体遊たいゆをされ當今とうこんとせし
鎖国さこく攘夷じやうゑいの難なんハ論ろんぜず断然だんぜんと御関ごかんきありし渠みちハ巢すく
穴あなを探たづみ恐おそるふたしと我が国わがくにの士民しゐんハ知しりしめ
皇国こうこくの武威ぶゐを海外かいがいより興張きやうちやう在あらせしれ度たと理りと竭きやく



復古三上十五

一偏^{いへ}に佐幕^{さむく}の論^{ろん}を擧^あげつゝ建白^{けんぱく}せしうと朝廷^{てうてい}の
島津^{しまづ}泉州^{せんしゅう}先達^{せんたつ}と上京^{じやうきやう}の朝野^{てうや}奮起^{ふんき}の折^{せり}を
永井^{ながい}の上表^{じやうひやう}あるも然^{しか}るに始^{はじめ}り毛利^{もうり}
中将^{ちゆうしやう}の雅楽^{ががく}を京師^{きやうし}に遣^{つか}はせしや公武^{こうぶ}御^ご一和^{いつわ}の周旋^{しゆうせん}
と鎖國^{さこく}攘夷^{じやうい}の趣意^{しゆい}ありしと中将^{ちゆうしやう}の命^{めい}を返^{かへ}し和親^{わしん}を
唱^{とな}へ佐幕^{さむく}と主張^{しゆちやう}し制^{せい}へ中将^{ちゆうしやう}の上書^{じやうしよ}と削添^{せうせん}し議奏^{ぎそう}
の下^{した}を呈^{まへ}せしと同藩^{どうはん}の有志^{いうし}伝^{でん}へし或^{ある}は怒^{いか}り或^{ある}は
詈^{ののし}り遂^{つい}に永井^{ながい}と討^うんと議^ぎするに浪花^{ななは}毛利^{もうり}郎^{らう}の苗^な

守居^{まもり}役^{やく}宍戸^{しやく}左馬之介^{さまのすけ}所^{ところ}及び京師^{きやうし}へ登^{のぼ}り壯士^{さうし}と鎮め
議奏^{ぎそう}中山^{ちやんしやん}大納言^{だいなごん}へ参^{まゐ}殿^{どの}し主人^{しゆじん}中将^{ちゆうしやう}の趣意^{しゆい}を弁解^{べんげ}
し雅楽^{ががく}より呈^{まへ}せし上書^{じやうしよ}を取^とり下^{くだ}げ故^{ゆゑ}に此^{こゝ}儀^ぎを取^とり消^けせ
夫^{おの}より宍戸^{しやく}左馬之介^{さまのすけ}の永井^{ながい}が旅宿^{りよど}に到^{いた}り相対^{あひま}し
論^{ろん}ぶるやうに這度^{こゝろ}上書^{じやうしよ}の一件^{いつけん}尤^{なほ}足下^{あしもと}の罪^{つみ}あつらひ畢竟^{いっけい}閣^{かく}
老^{らう}の指揮^{しき}より緋^ひの茲^{こゝ}に速^{すみ}びしあつらんと余^よは是^{こゝ}に潜^{ひそ}ま
察^{さつ}るといふも壯士^{さうし}も足下^{あしもと}の罪^{つみ}を悪^{わる}めり故^{ゆゑ}に此地^{こゝ}
滞^{とど}まるに却^{かへ}つて害^{がい}を招^まくよ似^にたり下^{くだ}先^{さき}江戸^{えど}に下^{くだ}る

可一と宍戸が説よ服一？永井の江戸に帰る一とど
中將雅楽が違謀を忌む程なく帰国を命ト一給ふ這
時よのう同藩の有志、永井が罪を益々悪く帰路
よと討んと私論を、永井のその機を察一らん東海道
み行んと一密よ道を横ぎりて仲仙道を浪花よ出
途中の危難を避るとりどと上書削漆の罪科よよ
遂よ明年亥の二月中將雅楽よ死を給ふよと切腹を
一と果たりたる是より橋永井と共に京師よ登りたる

徳川三十七

來原良藏ハ永井ガ後黒き計らひよ耻らん歸府の後
切腹一と死一たるよと這も潔よた壯士ありよむ再説
関東よの上方よ浪士等蜂起る一島津和泉も是よ
應ト浪士依鼓舞一 朝廷へ奏聞せ一由依在京の幕
吏より頻よ羽激依飛一注進のり一を関東よの
閣老松山侍従勝静板倉周防守村上侍従信忠内藤紀州姫路
侍従忠績酒井雅山形侍従忠精水野和龜山侍従信
筑前守 豊等大りよ當惑の有さるよと必定 勅命を

下^き一^き幕府の罪を謹責せられんより去^るル戊午の擾乱
一^は公武謹慎幽閑の人々を解^くよあぐりと朝廷より
御沙汰下らざる先^は御誓^い姻の慶賀を名^をとて大赦
宥許^をと行^はると然^らずと衆評直^ちらふ定^まりやされば
四月廿五日先達^はて謹慎を蒙^らり尾張前中納言殿
一^は搦刑部卿松平春嶽^{松平越前守}山内容堂^{松平土佐守}其外
未^だ々^と至^るるを殘^らる^る謹慎を解^せられたり又^も京都
うくも鷹司大閤殿近衛左府公鷹司右府公獅子王

徳和古三上十八

院宮栗田等何れも御慎解在^らせられり期^て長州候
る帰國せんと東武を癸^し五月朔日京師よ著^せられ
天機叛伺ひ給ひ^らう^らば當今畿内近国よ浪士蜂起せ
ゆ^へ島津和泉へ鎮撫を申^し付^けが猶其藩ふも和泉と
俱^によ力を尽^し鎮撫を策^する^ると仰^せ達^しる^るひ^ら長州
候畏^れの^る拜裁せ^らる^ると夫^れより京師よ止^まりて専^ら鎮撫
の周旋と竭^せられり又^も島津泉州へ當今勤^む王の魁
ふ^らり^ら往^り古兒島備後三郎高德の忠功よ伯仲^{する}の

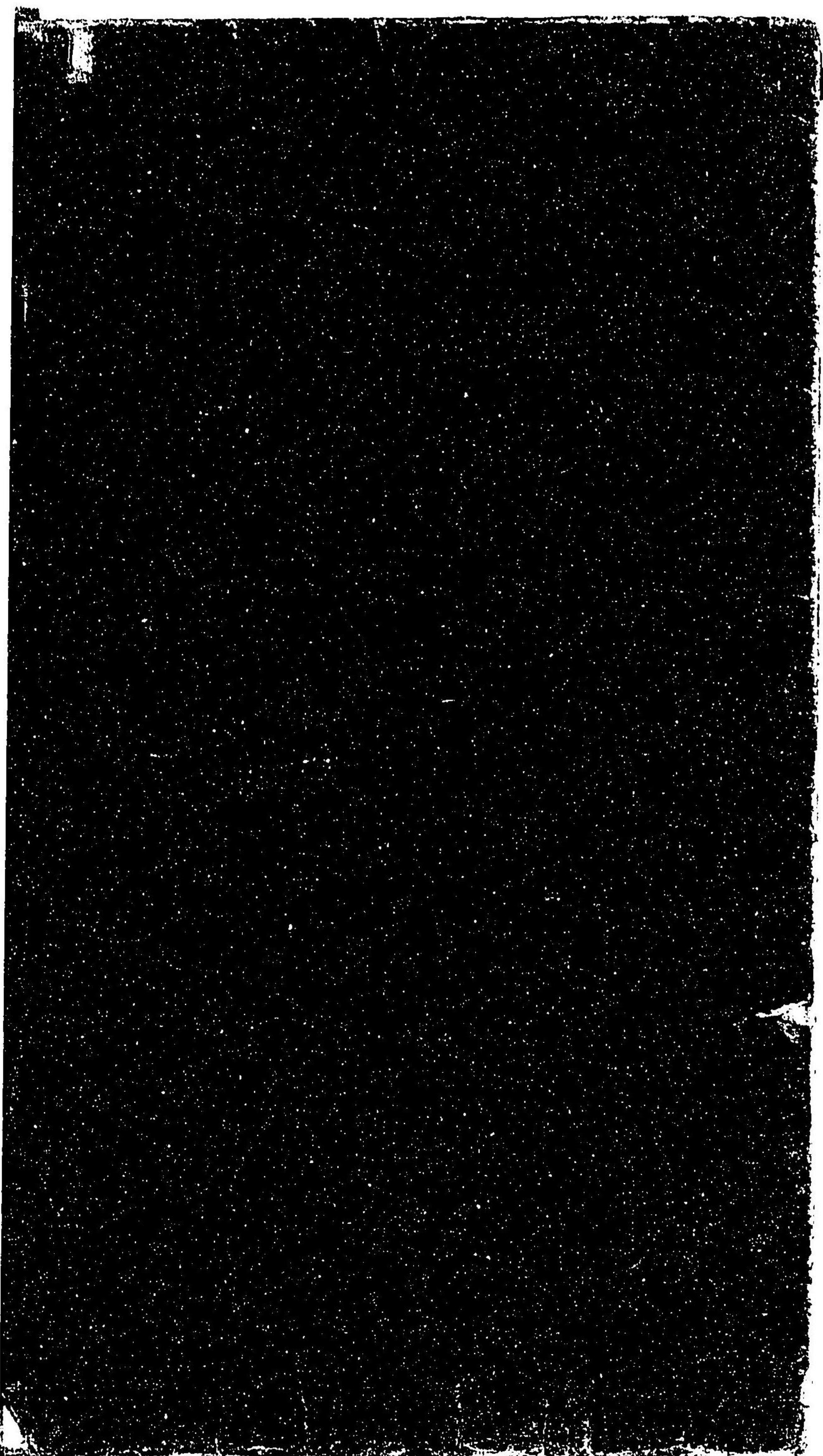
叡慮斜^まら^びば従^と今^ん和泉^を改^め三郎^と称^すま^き旨^一
叡慮在^らせ^らる^は是^れは^し島津^{三郎}と^も称^す
頃日^閣老^関宿侍^従へ 天朝^{より}仰^せ渡^さる^の旨^有ふ
よ^の上^京致^まん^き由^仰せ^達せ^らる^ふより 関宿侍
従^{より}東武^を發^し上^京ゆ^り一^ふ途^中老^{京師}の形^勢
勢^を確^開一^驚怖^做し^病氣^と称^し駿河^の府^中より
東武^{より}引^返一^是より 邸^内に^籠り^居る^更に^登城^も
在^らざ^りたり 恁^る武城^{より}頃日^朝威^盛ん^{なり}と

徳吉三十九

聞^えられ^ば幕吏^を追^る擯^斥黜^陟あり^つる^中に^服坂
淡路^守安宅^入道^揖水^ハ先^達と^所司^代と^て永^く滞^る
京^せら^る一^く 朝^廷向^の事^實を^触心^得有^らんと
再^び加^判の^列順^ト又^中務^大輔^を再^任り^つる^這より
田^安殿^を後^見職^を辭^し給^ふ恁^る 朝^廷より^確乎^に
た^る 叡慮^貫徹^在せ^らる^人き^と大^原三^位重^德卿^に
敕^使と^し関^東より^下向^せら^るき^ふ治^定せ^らる^る
則^正三^位左^工門^督に^任ぜ^られ^る五^月廿^一日^京師^を發^し

東路へ下向ゆるは這度々大支の 勅使は是バ島津
三郎久光道中の警衛とく供奉せられり同勢大
畧六百余人銃炮武器を嚴重に備へ威勢臨々として
進まれり是より 勅使東武より到着満しく如何
る物語りや否や開ハ集を續ぎ巻を改めり第七回
解分るを聴ねり

復古夢物語二編卷之上終



特 41

269

